



特集 変革期のアジアと宗教

# アジアの人道問題への日本宗教の取り組み — WCRP・ACRPの場合 —

わたなべ まさ子  
渡辺雅子

## 一 はじめに

今日では宗教の社会貢献活動は珍しくなくなったが、宗教間の協力によって、海外にも目を向けた支援活動を行った先駆的なものに、世界宗教者平和会議 (World Conference of Religions for Peace 以下WCRP) 日本委員会<sup>(1)</sup>、アジア宗教者平和会議 (Asian Conference of Religions for Peace 以下ACRP) がある。WCRPは諸宗教で構成されたNGOとして国連の経済社会理事會に属し、総合協議資格を与えられている。<sup>(2)</sup> WCRPでは約五年に一度宗教者による平和會議を開催し、時代が求める宗教者の役割を模索しながら、宗教協力による平和運動

を推進してきた。

一九七〇年一〇月、京都で第一回世界宗教者平和會議が開催され、神道、仏教、儒教、キリスト教、ヒンズー教、イスラム教、ユダヤ教、シーク教、ゾロアスター教、ジャイナ教など、世界三九カ国、三〇〇余名の宗教者が集まった。この會議上で、WCRPは継続機関として発足することが議決され、新役員として委員長にフェルナデス大司教 (キリスト教、インド)、副委員長六人のうち、日本からは立正佼成會の庭野日敏と金光教の三宅歳雄が就任した。事務総長にはホームー・ジャック (キリスト教、アメリカ) がなった。同年一二月にはWCRP国際事務局を国連ブラザ内に設置し、一九七三年五月、

WCRPは国連NGOに登録された。

日本に目を転じると、一九七二年に、京都会議を主催した日本宗教連盟国際問題委員会が発展的に解消し、常設継続機関「世界宗教者平和会議日本委員会」が設立された。これは、神社本庁、教派神道連合会、全日本仏教会、日本キリスト教連合会、新日本宗教団体連合会（以下、新宗連）の五連合会と、主要な宗教団体の代表者をもって構成され、委員長として、立正佼成会（以下、佼成会）会長、新宗連理事長の庭野日敬が就任し、事務局は佼成会に置かれた。

WCRPは京都会議（日本、テーマ「非武装・開発・人権」）以後、ほぼ五年ごとに世界会議を開催し、一九七四年WCRPローベン会議（ベルギー、「宗教と人間生活の質」）、一九七九年WCRPIIIプリンストン会議（アメリカ、「世界共同体を志向する宗教」）、一九八四年WCRPIVナイロビ会議（ケニア、「人間の尊厳と世界平和を求めて」）、一九八九年WCRPVメルボルン会議（オーストラリア、「平和は信頼の形成から」）、一九九四年WCRPVIバチカン会議（イタリア、「世界の傷を癒す」）、一

九九九年WCRPVIIアンマン会議（ヨルダン、「共生のための地球的行動」）、二〇〇六年WCRPVIII京都会議（日本、「平和のために集う諸宗教」）に至り、第八回京都会議には一〇〇カ国から二〇〇〇名が参加した。

ACRPは、アジアの諸問題の解決に向けて、アジア人による平和会議を開催したいとの要望が、WCRPIIローベン会議で出たことをきっかけに設立されたものである。一九七六年のシンガポールでの第一回会議を皮切りに、一九八一年ACRP IIニューデリー（インド）、一九八六年ACRP IIIソウル（韓国）、一九九一年ACRP IVカトマンズ（ネパール）、一九九六年ACRP Vアユタヤ（タイ）、二〇〇一年ACRP VIヨクジャカルタ（インドネシア）、二〇〇八年ACRP VIIマニラ（フィリピン）とほぼ五年ごとに会議が開催されている。

本稿では、日本の宗教者がWCRP、ACRPの活動をとおして、どのようにアジアと出会い、行動する宗教者として人道問題に取り組んでいったのか、そしてその過程で、どのような自己変革をとげていったのかについて検討していきたい。もちろんWCRP日本委員会の活動

の中には、アジアのみならず、世界に関することが含まれているが、ここではアジアにしほって論を進めることにする。

## 二 世界会議のインパクトと平和開発基金の設置

WCRP日本委員会は、世界会議で提起された課題を自らのテーマとして取り組んでいった。そのことが、日本宗教の自己変革の契機となったように思われる。

世界会議は日本の宗教者たちにとって未知の体験だった。「京都会議に参加した日本の宗教代表たちの間には、はじめからかなりの戸惑いがあった。宗教者がなぜ国連の専門家たちが論じるような軍縮問題などを宗教者会議で論じなければならぬのか。…宗教者がなぜこうした問題に主体的に取り組まなくてはならないかについて信仰的な答を出そうとすれば、従来の宗教の在り方や信仰に対する基本的理解、特に世俗社会との関わりについて根本的な反省を迫られることになる。…これまでの宗教者は、『内なる平和』だけにかかわりあっていて、『外なる平和』『世界の平和』には疎いか無関心だった」ので

ある。<sup>(3)</sup>このように世界会議は、日本の宗教者にとって外に眼を向けるきっかけになった。

一九七四年八月、ベルギーのローベンで開催されたWCRPIIは、「宗教と人間生活の質——地球的課題に対する宗教者の応答」がテーマとされた。ローベン会議から帰国した日本の宗教者の間に「祈りから行動へ」の第一歩を踏み出すため、少なくとも月に一度は一食を抜いて、世界中の飢えた人々とひもじさを共にし、その一食分を献金するという「一食を捧げる運動」が松緑神道大和山教主の田澤康三郎の発案で始まった。「単にものを捧げるという意味ではなく、自分たちが空腹を経験することによって、世界の苦しみを感じ、苦しむ人々と支えあつていこう」という呼びかけである。これがきっかけになり、一九七五年一月には平和開発基金運営委員会が発足し、開発途上国への援助活動の道が開かれた。<sup>(4)</sup>

一食による資金によって、実際に支援活動をする経済的基盤がつくられたことは重要である。そして、この実践は、加盟教団の信者にも一食を捧げることによって、途上国支援に対して主体的にかかわる意識をもたせたと思